

安全への提言



コロナ禍に思う「安全・安心な社会」 — 納得をベースにした「実効性」の向上 —

む とう じゅん
武 藤 潤†

社会が新型コロナウイルスに翻弄されて一年経過した。収束に関しては、まだまだ予断を許さない。しかし、この一年でコロナへの理解や対応は確実に改善した。当初は新型コロナに関する疫学的・医学的な情報や知見が限られており、社会には不安が渦巻いていた。とても「安全・安心な社会」とは言える状態ではなかった。しかし感染拡大の抑制や医療体制の逼迫など課題は残るが、この一年で大きな前進が見られた。

事例や症例も増えて、疫学的・医学的に研究も進み、重症化リスクの低減や医学的な対処方法など明らかになってきた。

感染拡大を抑制するためにマスクの着用や日本で始まった三密回避は、その有効性が世界でも認められ、WHOも密集・密接・密閉（Crowded, Close-contact, Confined）の頭文字がCであることから「三つのCを避けよう」（Avoid the Three Cs）と提唱し、世界中で生活・行動様式として定着した。

当初、数年は要するといわれたワクチンの開発が加速し、接種に向けた取り組みが始まった。

一方、世界中にワクチンが普及し、地球規模でのコロナ禍からの解放には、まだ時間がかかりそうだ。当面は、with コロナを前提に三密回避の取り組みを実効性を高めて継続することになる。

新型コロナウイルスは、人体に感染すると呼吸器官をはじめ各種器官や機能に影響を与える。健康を害することから、健康の問題と云えなくもないが、その影響の程度や時間軸の短さから、わたしは、健康というよりも安全の問題として捉えている。

私たちは「安全と安心」をセットにして同じような意味で用いることが多い。安全や安心について定義を整理して掘り下げて考えてみると、それぞれの改善・向上のために求められるアクションが全く異なり、安全と安心が似て非なるものであることに気がつく。

まず安全についてだが、安全な状態とは、事象の影響度や発生確率が、許容できる水準にある状態と定義しよう。事象の影響度や確率がどの程度なら許容できるのか、その判断に個人差はあるが、定量的・客観的・論理的な議論が可能だ。影響度または確率がゼロであれば、それは絶対安全ということになるが、現実の社会では、絶対安全は考え難く、ある影響度、ある発生確率の事象があり、それが許容できる水準に無い場合は、危険と認識し、アクションを講じて、許容できる水準にまで改善することになる。潜在的な危険源

（事象）を見つけ出し、影響度と確率が許容できる水準か否か評価し、否の場合は、許容できる水準にまで改善するプロセスは、システムティックで、まさにリスクアセスメントそのものだ。

安心はどうであろうか？ 安全と比較して、定量的・客観的・論理的というよりも定性的・主観的・感情的な要素が含まれている。ある事象に対して前述のリスクアセスメントを行って、事象の影響度や発生確率を評価し、それらは許容できる水準、すなわち安全であるとの結果を得たとしよう。私たちは、その結果を素直に受け入れて「安心」と感じるだろうか？ 安全はリスクアセスメントのプロセスを踏み、適切なアクションを講じることで、事象の影響度と確率は確実に改善することができる。しかし、それに対応して一人ひとりが感じる安心の程度が高まるとは限らない。不安や心配という感情を持つことは人それぞれだが、どこから湧いてくるのだろうか？ 個人のリスク選好、主観、性格による影響も否定はしない。しかし、より大きな要素として、事象にかかわる情報の質や量によることが圧倒的に多いのではないかと思う。用心深い性格だから安心できないのではなく、安心の程度を高める情報の信頼性とか信用の問題ではなかろうか。質・量ともに適切な情報によって、「納得」できることが安心の大前提だ。ここが揺らいでいるのは、「安全・安心な社会」にはならない。一年前のコロナ禍当初は、コロナに対応する信頼に足る情報が、今と比較して、圧倒的に不足していた。ゆえに社会は不安で満ちていた。

さて、ワクチンが普及し、コロナ禍からの解放には、しばらくは、実効性の高い三密回避を続ける必要がある。日本の三密回避は「自粛」であり、諸外国に見られるようなペナルティーや強制を伴うものではなかった。当時、情報が不足していたことに加えて、横浜港の豪華客船の感染問題などで不安は高まり、個人の自由を制限する「自粛」に対しての「納得の程度」と実効性は今よりも高かったように思う。実効性の向上にペナルティーや強制といった手法を否定する意図はないが、より大切なことは一人ひとりの自粛に対する納得感だ。前は不安感によって自粛することの納得感が高まった。これからの納得感は、「不安に怯えて」ではない。世には、インターネット、SNSなど情報が溢れている。それらを咀嚼して「正しく恐れて感染拡大を抑制し、安心感を増す」ものであってほしいと願っている。一人ひとりの納得にもとづく実効性の向上こそカギだと確信している。

† 鹿島石油（株）：〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-2